

詩を読む 2

あたり前なこと ー谷川俊太郎「ぼくは言う」

あたり前なことをあたり前と思わないで、考えてみよう、と哲学者は言う。

あたり前なことをあたり前にするために、法律に書いておこう、と法学者は言う。

あたり前なことがどのようにあたり前になっているかを調べよう、と文化人類学者は言う。

でも、ふつうはあたり前なことについては考えないし、書かないし、調べたりしない。あたり前なことについて考えるのはたいへんだし、書くのは面倒だし、調べるのはけっこう難しそうだ。

でも、生きている中で楽しんでいる「あたり前なこと」については、はっきりとそのことが楽しい、幸せだ、すばらしい、と言ってみたくならないか？

谷川俊太郎（たにかわ しゅんたろう）の詩はそう問いかけている。

ぼくは言う

谷川俊太郎

大げさなことは言いたくない

ぼくはただ水は透（す）きとおって冷たいと言う

のどがかわいた時に水を飲むことは

人間のいちばんの幸せのひとつだ

確信をもって言えることは多くない

ぼくはただ空気はおいしくていい匂いだと言う

生きていて息をするだけで

人間はほほえみたくなるものだ

あたり前なことは何度でも言っている

ぼくはただ鯨は大きくてすばらしいと言う

鯨の歌うのを聞いたことがあるかい

何故か人間であることが恥ずかしくなる

そして人間についてはどう言えばいいのか

朝の道を子どもたちが駆けてゆく

ぼくはただ黙っている

ほとんどひとつの傷のように

その姿を心に刻みつけるために

『どきん—谷川俊太郎少年詩集』理論社より

「水が透きとおって冷たい」こと、「のどが乾いたときに水を飲むと幸せな気

分になる」こと、「空気はおいしくていい匂い」がすること、「生きていて息をす
るだけで、ほほえみたくなる」こと、「鯨が大きくてすばらしい」こと、こうし
たことは「あたり前なこと」だ。

私たちは「あたり前なこと」に慣れてしまっていて、それについて何も考えな
い。でも、こうした「あたり前なことは何度でも言って」、その「あたり前なこ
と」の楽しさをかみしめることは大切なんだな、と思った。

鯨は口から音を出して仲間とコミュニケーションをとっている。それが「鯨の
歌」だ。鯨の歌は、3000km 先までとどくことがあるそうだ。鯨の歌は聞いたこ
とがないけれど、ずっと前に、沖縄の海で、大きな鯨が海面から大きく飛び跳ね
るのを見たことがある。感動的だった。

だから、鯨に接したときに感じる「人間であることの恥ずかしさ」についても
分かる気がする。生きものの中で、人間だけが、生きものの「あたり前」から外
れているように思うからだ。

2021 年の今、世界中でコロナウィルスが人間をおそっている。しかし、人間
も環境破壊などで、地球やほかの生きものたちをおそっている。地球やほかの生
きものたちにとっては人間の方がウィルスなのではないか。そうした人間の姿
について、「どう言えばいいのか」？ 特に、人生の「朝」を生きる子どもたち
に対して、「どう言えばいいのか」？

私も詩人と同じに「ただ黙っている」。未来に向かって「子どもたちが駆けて
ゆく」姿を「心に刻みつける」ことができるだけだ。心の中のその姿を「ひとつ

の傷』として受け止めていくしかない。

(1268 字)

(2020.4 Written by Masami KADOKURA)

<参考資料>

・谷川俊太郎『どきん—谷川俊太郎少年詩集』(理論社、1983 年)

★谷川俊太郎のほかの詩集 1 冊と、翻訳詩集 1 冊を紹介します。

・谷川俊太郎『ことばあそびうた』(福音館書店、1973 年)

・谷川俊太郎『マザー・グースのうた 第 1 集 おとこのこってなんでできてる おんなのこ
ってなんでできてる』(草思社、1975 年)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品
を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典:「たどくのひろば」(<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use
this work, please indicate the source as in the example above.